

WARHAMMER
FANTASY
ROLE-PLAY

ウォーハンマー-RPG



ライクランドに冒険あり！

クレジット

デザイン：アンディ・ロー、ドミニク・マクドウォール

ライティング：ベン・スケッチ

アディショナル・ライティング：アンディ・ロー

イラストレーション：ジョン・ホジソン、スコット・パーディ、ラルフ・ホースレイ

グラフィックデザイン&レイアウト：ポール・ボーン

エディティング：スィーネ・クイン

プロデューサー：アンディ・ロー

パブリッシャー：ドミニク・マクドウォール

WFRP4e デザイン：アンディ・ロー、ドミニク・マクドウォール

スペシャルサンクス：ゲームズワークショップ社

英語版発行所：キュービクル7エンターテイメント社

英国、スウィンドン、SN25 5AZ、グラウンドウェル・インダストリアル・エステート、ハーグリーブス・ロード、
ジェミニ・ハウス、ユニット4-D3

本書のいかなる内容も、事前の許可なく電子的、機械的、コピー、録音、その他の方法で、
複製、検索システムへの保存、またはあらゆる形式での送信を行うことを禁じます。

日本語版 ウォーハンマー RPG ライクランドに冒険あり！

2021年6月 初版発行

翻訳：阿利浜秀明、岡和田晃、見田航介、待兼音二郎、田井陽平

編集：伏見義行

営業：上田明

日本語版デザインワーク：田中彰

カスタマーサービス：whrpg@hobbyjapan.co.jp

発行所：株式会社ホビージャパン

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-15-8



ウォーハンマー RPG の著作権はゲームズワークショップ社に帰属します。

ウォーハンマー RPG、ウォーハンマー RPG のロゴ、GW、ゲームズワークショップ、ウォーハンマー、ファンタジー・バトル、
双尾の彗星のロゴ、及び関連するロゴ、イラスト、画像、名称、クリーチャー、種族、乗り物、地名、武器類、キャラクター、
それら独自の創作物は世界中で多様に登録され、権利者の許可の下でのみ使用されます。

キュービクル7エンターテイメント、及びキュービクル7エンターテイメントのロゴは、キュービクル7エンターテイメント社の登録商標です。



◆ ADVENTURE AFOOT ◆ IN THE REIKLAND!



ライクランドに冒険あり!

このPDFファイルで提示されるアドベンチャー・フックはGMが『**ウォーハンマー RPG ルールブック**』の「**第10章：壮厳なるライクランド**」に記載された場所を用いてオリジナルのアドベンチャーを自作するためのアイデアと、全体を通じてライクランドに関するいっそう詳しい情報を与えてくれる。アドベンチャー・フックごとに使いやすそうな場所が太字で記載されているが、必要に応じて気楽に場所を変えたり中身を変えたりしてもかまわない。

山脈、丘陵、フォルバークラント ; THE MOUNTAINS, FOOTHILLS, AND VORBERGLAND

掘り返さぬほうが賢明

灰色山脈にある人里離れた**ファルケン辺境領**の辺境伯、ヘルゼット・フォン・リラハレは厄介な問題に直面している。彼女が派遣した探検隊の一隊が長らく放棄されていた**鉱山**に出くわし、その奥で黄金を見つけた。都合が悪いことに、その**鉱山**はカラク=アズガラズのドワーフたちがはるか昔から領有権を主張しており、さらに下層へ行く入口に証拠となる装飾が残されていることも判ってしまったのだ。黄金の採掘が始まる前に、ヘルゼットは目立たない部外者を雇ってその装飾を雲散霧消させ、そうすることでドワーフたちの主張を潰してしまうと考えている。しかしながら、装飾のルーンはありふれた代物ではなく、それを破壊しようとするいかなる行為も、本来の権利者の末裔へ警告を及ぼす。さらに、もし爆発物を用いるようなことがあれば、崩落が生じる結果となって山脈の奥深くへと続く洞窟が口を開ける。そして、そこでは、ドワーフたちがその**鉱山**を棄てる原因となった何ものが目覚めてしまうことだろう……。

生きた食料貯蔵庫

灰色山脈を通過する主要な街道上の**斧喙峠**で旅人たちが行方不明になっているという噂が絶えない。やけっぱちになった、あるズタボロの護衛兵が、自分は恐るべき真実を知っていると言う：商隊が丸ごと連れ去られ、その全員が生きた食料貯蔵庫に隠蔽されたと述べているのだ。護衛は自分を捕らえたものが何であったか目にしていない——命からがら逃げ出したのだ——が、奪われた商人の荷物はそっくりそのまま、いまだ山脈に残っていると証言している。つまり、救出することでの報酬は高額になりそうというわけだ。護衛が嘘をついて、

救出にやってくるだろう者たちを人喰いどもの罠へ誘いこもうと企んでいるのだろうか？ それとも商隊は本当に面倒ごと——飢えたストーン・トロールやジャイアント、またはもっと厄介なものかもしれない——に巻き込まれているのだろうか？

聖なる血

リヒデクスの町々に手配書の張り紙が急増している：近ごろアルドルフに出没するキザ・グランムルの首にクラウン金貨10枚。賞金は首と引き換えに“**割れ柄修道院**”にて、というものだ。賞金は首と引き換えに“**割れ柄修道院**”から支払われる。捜査の結果、キザとは**ヘーゲルクリープス**で採掘していたとの噂がある、冒険心あふれる古物研究家だと判明する。最後に町にいた時、彼女は自分の発見物にえらく興奮して、「エンパイアを核心から揺るがすことになるわ!」と言い張っていたという。いったい彼女は何を見つけてしまったのだろうか？ そしてシグマー教団の修士たちが大枚を支払ってでも彼女の死を望んでいるのはなぜなのだろうか？ 真相が何であれ、パーティがそれに興味を抱いたなら迅速に動いたほうがよい。というのも、2人の賞金稼ぎがすでに追跡を始めているだけでなく、ウルリック教団の托鉢僧たちもまた動き出しているからだ。おまけに、とある吸血鬼までが追跡に加わっているのだ。

鉱石よりも先に鉄のインゴットが出た

オツェルのレディ・フェメケは苦境に陥っている。衰退しつつある所領の村に何かしら新しい活力をもたらそうと、彼女は**スカーク丘陵**近辺に銀の**鉱脈**が新たに発見されたと発表したのだ。そればかりでなく、勢い余って、それを採掘する権利の一部を売りに出してしまったのである。そのような**鉱脈**は実在しないのだが、すでに**鉱夫**たちが殺到している。しかしながら、フェメケは、自作自演の**ゴールド・ラッシュ**ならぬ**シルバー・ラッシュ**の活況が、つまらぬ事実の露見によって台無しになってしまうことを許すようなご婦人ではない。彼女は新たに手にした富を用いて、**エルドラック・アイアンアイ**——変わり者のドワーフの採掘者——を雇い、**鉱夫**たちが去ってしまう前に本物の**銀脈**を探させることにした。そのため、フェメケはこの採掘者を野獣やビーストマン、グリーンスキン、そして**エルドラック**の妻と彼女の3人の兄弟——彼女たちは**エルドラック**へ、家に帰って借金を返すように要求している——から護衛するため、有能な者らが必要としている。それも大至急で。



気に留められず、見逃してもらえず

ブリーの港の荷役夫たちによれば、**スカーク丘陵**は遺体を隠すのに最適な場所とのことだ。何とんでも、無数の掘削済みの穴が何マイルにもわたって存在し、そこを調べる者もないからだ。だから、名高い宝石泥棒カルス・ライシュタットが犯した罪のために打擲されて死亡し、**ブリー・リッジ**の下に埋められることとなっても、大して気にする者はなかった……この悪党が最後の獲物——鶏の卵ほどの大きさのダイヤモンド——を死ぬ前に飲み込んだという噂が広がるまでは、さあ、狩りの時間だ！

ジャバースライスのお産に立ち会え

ラインホルト・シェント——帝立動物園に勤めていると言い張る自称“幻獣学者”——は、非常に特殊な標本を届けた者に、高額を支払いをするという。学者のなかには、最も恐るべき怪物、伝説のジャバースライスが、実際に繁殖していると信じる者がいるのだ。シェントは**ハルト**からそう遠くない**フォルバークラント西部**にこの種族の繁殖例があると思い込んでいるのだ！ シェントは研究のためにそのおぞましい出産を目撃し記録して、産まれたばかりの幼生を持ち帰るべく幾人かの勇敢な仲間たちを求めている。彼はこともなげに大して難しい仕事ではないと言うのだが、そうなのだろうか？

ラナルドの加護

謎めいた“レディ・ミュンツェ”は**フォルバークラント**——^{フォルバークラント}——にある多くの下層の酒場の常連客だ。彼女は貴族どもが葡萄園の農民たちに働かせて自分たちは肥え太り、1本のワイン瓶を農民一家が一生かけても拝めないような金額で売り飛ばしているのだと静かに囁きかける。「これで、**ラナルドの庭とはね**」と彼女は皮肉なもの、険しい顔には不満がまぎまぎと現れている。相手が話に乗ってくると、レディ・ミュンツェは出荷される上質のワインを無価値な酢にすり替えるといった形で、この不正義と戦ってくれる勇者を探しているのだと告げる。このすり替えは**ウィッセンランド**辺境の**ダンケルベルク**と**ケーニヒスドルフ**の街道上で——人目につくことなく——行なわれる。彼女の誘いは危険だが、その財布はずっしりと重く、“**ラナルドの加護**”という文句が縫い付けられている。彼女はこのすり替えを実行してくれた者への報酬は金に糸目をつけないが、露見してしまった者には何も払わない。

世界の頂上にて

有名なインドゥア人の登山家、テンジン・ノーレイが**ホイブルク**にいる。彼は**ドラッケンベルク**の山頂に、生きてままだ到達する初の人物になるべく挑戦に乗り出しており、征服の目撃者となってくれる一行には巨大なサファイアを提供しようと申し出る。剃刀のように鋭い岩、雪崩の危険、捕食しようと襲いくる脅威など、これほどの偉業（およびそれに伴う名声）からすると、まるで取るに足りない。しかしながら、言葉とは裏腹に、テンジンは単なる名誉以上のものを求めている。というのも彼は実は影の魔法体系の手練れであり、山頂のオベリスクに封じられている太古の邪悪を滅ぼすための手駒として、キャラクターたちを利用しようとしているからだ。

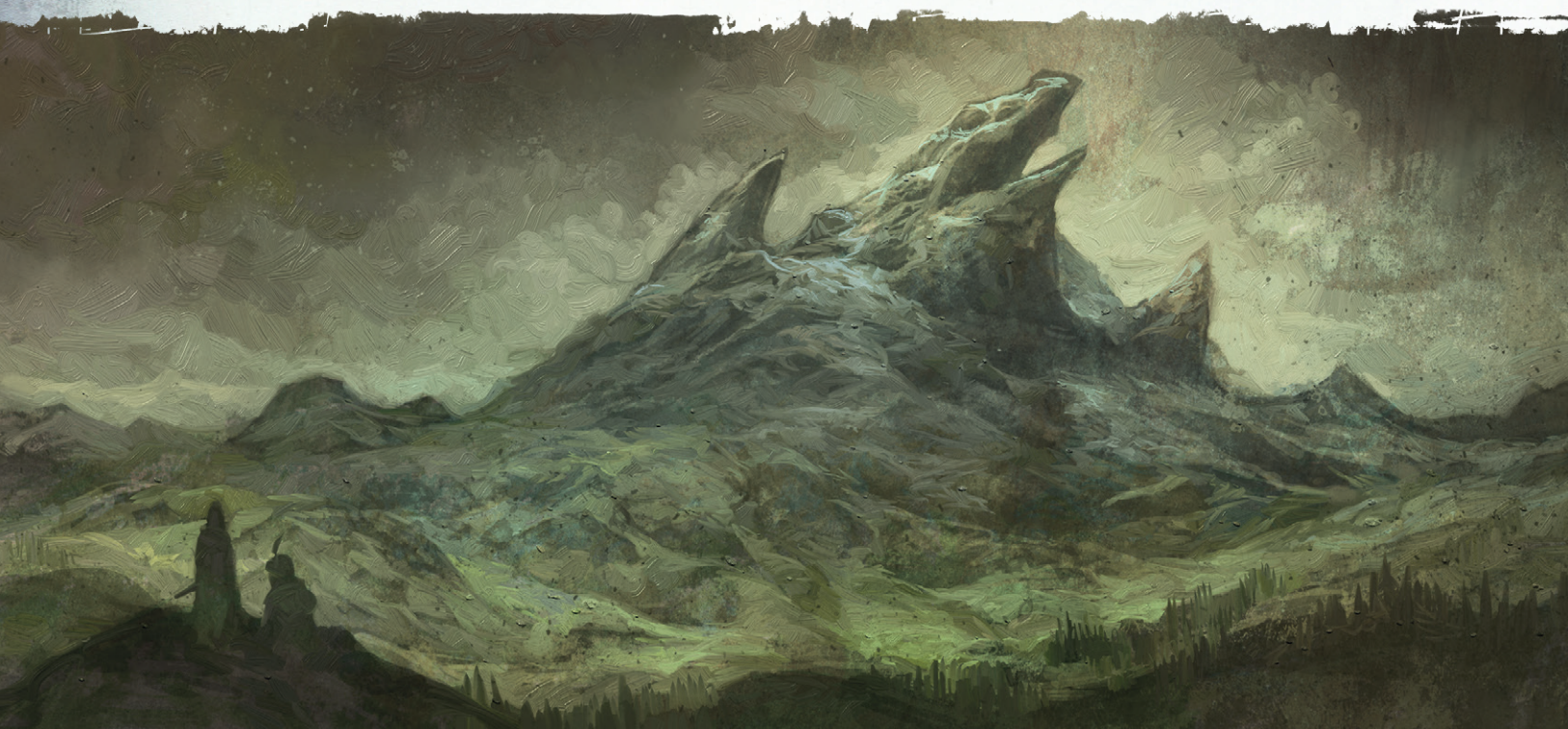
竜殺しの居所を探せ

ドラゴンの**カレダイア**はもう人間にとっての何世代もわたり目撃されていないが、だからといって竜殺しこと**ソグナ・インゴットフィスト**には関係ないことだ。**ドラッケンベルク**の麓にある**マンティコア城**の衛兵たちの証言によれば、かの巨大長虫が最後に目撃された場所だということから、インゴットフィストは**ドラッケンベルク**を登り、そのまま降りてきていないという。衛兵たちを信じるのであれば、彼女はそこで使うこともままならない——「スレイヤーたること、それがすべてだ——わかるだろう、誓いなのだ」——語り尽くせないほどの富を見つけたはずである。だが、インゴットフィストへバグマンの最高級ビールを一樽持って行って、器にビールを並々と注いでやれば、何かしらの秘密を漏らすだろうとも言われている。彼女の居場所を見つけ出せばいいだけだ。

陰鬱な深き森 ; THE GRIM, DARK FORESTS

うまく生き延びるまで、うまく騙し抜け！

街道強盗はいい金になるものの、いまやマティルデ・シュリッツは足を洗いたがっている。彼女は森の怪物どもに自分の一連の罪をなすりつけるつもりだ。その目的を果たすため、彼女は誰かしらに依頼して、**ライクヴァルド**にある魔脈の石の一種、すなわちピーストマンのもの





に相違ないアーティファクトを奪わせようと考えている。これらを、街道巡視員たちがうまく騙されてくれるよう、適切な場所に配置するつもりなのだ。しかしながら、マティルデは行方をくまらず直前に、ろくでなしどもが邪悪なアーティファクトを使って犯罪を隠蔽しようとしており、どこにいけば証拠が見つかるのかを街道巡視員にさりげなく告げ口するわけである。事態がどう転んでも、マティルデは責任を取らずに済むという算段だ。

名称に何の意味がある？

アンバーグリッセンからそう遠くない**鮮血松林**にて、輪になった死骸が逆さまの状態の木々に吊り下げられている。樹の根元に血が夜闇のようにドス黒く染めぬき、その樹皮はいっそう赤みが増している。喉が横一文字に切り裂かれている以外、死骸に損傷はない。動物や蜘蛛、あるいはゴブリンに喰われた痕跡はおろか、争った様子もない。地元住民は何も知らないと言い張り、そんな恐ろしい供儀のこなどまったく聞いたこともないと繰り返すばかりだ。琥珀の学府の呪術師たちに接触を図ってみても、同様に黙して語らない。怪異というものは調べられなければ、何も起こらないのだ。もし、それを調べるとしたら、新たに血のしたたる死骸の輪が吊るされる必要があろう。そして、地元住民はその正確な作法を承知しているというわけだ……。

何ひとつ無駄にするなかれ

ヴィリベルト・クレム——**アルトドルフ**出身の商人——はジャイアント・スパイダーどもが**鮮血松林**に侵入してきたせいで利益を損失し、悲憤慷慨している。とにかくペニー真鍮銭数枚なりともをまずは手渡してやらないことには、クレムの失意が癒えることはないだろう。加えて新しい計画がすでに煮詰められている：ジャイアント・スパイダーの絹を利用するのだ！ 材木を売り物にできないのなら——ああ、ハントリヒ神の御名にかけて、代わりに絹を売ればいいという算段である！ 彼が必要としているのは、ただ実戦経験豊富で有能な絹収集人たる仲間なのだ！

束縛する絆

グリッセンヴァルトには魔女がうろついているとの噂がある：アンジェラ・ヘバメだ。ヘバメはかつてエンパイアで最も有名な産婆だった。彼女は数十年前にはアルトドルフのホルスヴィヒ＝シュリーシュタイン家とナルンのリーベヴィッツ家の両方に雇われるほどに優秀で、彼らの現在の子弟たちを取り上げたのも彼女だと噂されている。お産を手伝う最中に、ヘバメが強力な呪文を唱えたという話が密かに囁かれている。市民社会からドロップアウトする前、彼女はこれらの呪文によってエンパイアの行く末を自分だけが予見できるよう仕向けたというわけだ。今や、多くの者が魔女の予言を聞くために、大金を支払おうとするだろう。

河川、運河、湖

；THE RIVERS, CANALS, AND LAKES

ライク爺様の島

船乗りたちは**ライク爺様の島**——河の神が自ら治める**ライク河**に浮かぶ謎めいた島である——についてあれこれ話し合うのが大好きだ。アルトドルフのマナン教団はマリエンブルグのライバルたちより優位に立ちたいと思って、この島にまつわる伝説を喜んで支持しており、ライク爺様はマナン様ご自身に他ならぬと主張している。しかしながら、“爺様”が実のところ、鯨と海賊、難破船荒らしの神たるストロムフェルズかもしれないと噂する者たちもいる。彼らはこの河でかなり多くの船が難破させられているし、“ライク”という発音が“難破”によく似て

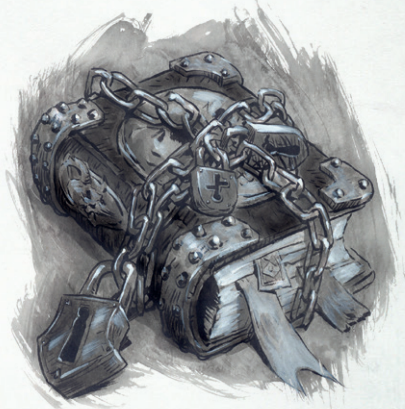
いると声をひそめつつ語るのだ！ だがライク爺様はどちらでもないし、そのような憶測をお喜びにならない。ゆえに、かの島に次に上陸する者はかの神の伝令の役割を担わされるだろう。好むとも好まざるとも……。

偉大なる40フィート

この30年間、テレンツ・ガウバッツは——エンパイアの動物学者にして、未確認動物の正体を突き止める専門家のことだが——“將軍”を失ったことで悩んでいる。このおよそ40フィートものスターバイク（訳注：ライク河の巨大魚）は、ガウバッツがその正体を突き止める前に捕まり捌かれて、事もあろうに食べられてしまったのだ。しかし、最近になって**ライク河**沿いの**レンゲルン**近くで怪物めいた魚の群れが目撃されたとの情報がある。話に聞くその大きさからすると、それは“將軍”が死ぬ前に産み落とした稚魚の可能性がある。もしそうであれば、生きた標本そのものが宝物となる（ガウバッツがそれを届けてくれた者に金貨で報いてくれることは言うまでもない）。

水が問題？

ベーゲンハーフェンに住むアラビヤの哲学者たるワリーヤ・エル＝シャーは何やら奇妙なことが起きているのに気付いた。彼女はその奇異な現象を解明しようとして**フォルパークラント**に流れ込む前後の**ベーゲン川**の水温を何年も計測してきた。最近になって、彼女は季節外れの水温の上昇に気付いた。河が特に水量が減った場所で水温が跳ね上がっていることから、彼女はある仮説を立てた。“信心深き哲学者たちの帝立協会”は頼りにならないので、彼女は五里霧中状態の熱源調査を手伝ってもらおうと、借金して護衛の団を雇った。彼女の仮説が正しければ、水面の下に待つもののおかげで、彼女は能う限り多くの



助力を必要とすることになるだろう。

水先案内人の憤り

ブクスヘッドの水先案内人ギルド会員オスカル・グリースグラムは憤懣やるかたない思いでいる。彼の所属団体は常に人員を少なめに抑えており、トイフェル川の危険な河口を通る平底舟が極めて高額になるように仕向けていたのだ。しかし、**グリュンベルク運河**が何もかも台無しにしてしまい、今では“**レオポルトの愚行**”の沈泥だらけの水域を通るよりも人工の水路を通る平底舟の方が多くなっている。グリースグラムは今こそ決起の頃合いだと考えている。彼自身が手を汚すことができないのは明らかだが、利害関係にある仲間らにうっかり運河の一部を爆破させたり、何かしら恐ろしいクリーチャーに近くに巣を作らせたりすることに成功したならば、彼は毎月の稼ぎの一部から喜んで経費を負担するだろうし、それに応じて商売は確実に景気がよくなるだろう。

引退したキャセイ人夫婦

リン・リー・チュン——有名だが認可されていないキャセイの妖術師——とその妻は、オールド・ワールドへ旅行に行くことにした。彼らは最果て山脈を越え、ル・アンギーレの地でご馳走を平らげ、マリエンブルグで買い物をし、いまは**フォルバークラント運河**でクルージングをしている。ライクラントへの来賓たちはどこへ赴こうとも無知蒙昧な地元民により危険にさらされるので、地元の当局は賓客を保護し、キャセイとの外交問題を起こさぬよう皇帝より命じられているのだ。しかしながら、正式な指揮系統が存在せず現地の領邦軍の防衛ラインが紙のように薄く引き伸ばされている**ユーベルスライク**では、護衛の任務は雇用可能な者に委託される。ゆえに、寄せ集めのパーティが命がけでこの老夫婦の身の安全を守っていることもあるのだ。不幸なことに、リン・リーは無認可の魔法が違法であることを理解していないようだ。暗殺者がやって来た際に、気にかけてくれる者はいるのだろうか？

イカれたレース

貴族が好んで行うことをひとつ挙げるとすれば、自分が他の誰にもまして秀でていることの証明だ——とりわけライバルの貴族たちよりも。ボヤール・ドミニク・チューリンは自分が主宰する次の企画が**ヴァイスブルック運河**を下るヨットレース対決であると決定した。勝者はチューリンの故郷たるキスレヴにある領地の権利詔書が授けられる！この競争は熾烈だが（そしておそらく非合法である）、賞品はそれにふさわしいものだ。ヨットを確保し、参加料を支払い、狭い運河を何とかして通り抜ければよいだけだが、その間に他の参加者20名が同じことをしてくる。彼らは、恐ろしいほどの数の小型大砲を積んだ技師や巨大な船の番犬を連れた商人、帆が一枚も張られていないヨットを駆る黄金の学府の魔術師といった顔ぶれが束をなしているのだ！

悪臭放つ呪われし沼地たち

； THE CURSED AND FETID MARSHES

不幸を呼ぶ尻尾

武器鍛冶の商品をよく調べていると、奇妙なメイスが目につく；泥鉄鉞の柄が取り付けられ、鮫皮状の鱗を重ねて作られ、カリフラワーのように骨がひと塊になっている。鍛冶屋はそれを**グルートシェール沼**からやって来た男から買ったと言い、その男は沼の怪物の尻尾が成長したものだと主張していたのだとか。そのメイスの頭部は驚くほど重く頑丈で威力がある。鍛冶屋曰く、そのメイスの頭部に関する信頼できる情報源が見つかりさえすれば、かの沼地に勇敢にも挑む抜け目のない一行はひと財産を稼ぎ出すことができるだろう、と。

ゴールム・グラットンガットの肉料理屋

ゴールム・グラットンガット——**アルトドルフ**のオウガの“シェフ”——は自分の肉料理屋で客に供する新しい肉をいつも探している。肉は大きければ大きいほどよく、他の基準は関係ない。ジャイアントの肉は入手困難ではある一方、**アルトドルフ平原**ではリバー・トロールがよく襲撃してくるから肉には困らない……グラットンガットはプレミアムなランプ肉に大金を払ってくれるだろう。奇跡的に、そのような肉塊が入手できたとしても、肉の売り手は細心の注意が必要だ。というのも、肉の本体が死亡したずっと後になっても、トロール肉の再生機能は失われないと考えられるからだ。そのような肉を持ち運ぶこと、または輸送することでさえ、準備ができていない者にとってはすぐさま予想もつかないような事態に陥りうるのだ。

証拠は船尾棲甲板の下に

ストリガニーの老朽船、〈リヤール〉号は“**レオポルトの愚行**”に座礁してしまい、まるひと月以上も手付かずのままそこに横たわっている。流言や迷信がストリガニーを取り巻いており、人々はこの流浪の民族が恐ろしいアンデッドと手を組んでいると囁いている。これまでのところ、内部にいるかもしれないものを恐れて誰もこの難破船に近づこうとはしない——**ライカー境界地帯**中にある貪欲な漁り屋たちでさえも——ゆえに調査に赴くほどの勇気がある者たちにとっては、〈リヤール〉号は格好のターゲットとなる。

モールの血

「**ウーラント湿原**のカラス石の近くで、あんたに知っといてほしいものを見つけたよ。この黒い岩の破片がそれさ。あそこには、うんとたくさんあるのさ。ほら、ちっとも特別には見えないとわかつちやいるけど、あたしの手をこんなに汚してるんだ。見てよ、まだ真っ黒のまままだ。で、こいつを砕いて、媒染剤少々と混ぜたら、あんたが見てきた中でいちばん黒い染料が出来上がりって寸法だ。アルトドルフのお大尽連中は大騒ぎするだろうね！ まあ、あたしはその後に人生で最悪の悪夢を見る羽目になったけど、紳士の皆さんが知る必要はないね、でしょ？ あの人たちは、ただ自分のローブとかそんなのを染めるのにふさわしい黒の染料がほしいだけなのさ。そして、あたしたちはお大尽連中のために、染料を手に入られるってわけ、そうでしょ？」



多種多様な都市や町

； THE MANIFOLD CITIES AND TOWNS

真実は長い〈尻尾〉の後ろにあり

（訳注：原文はTall Tailsで、口からでまかせを意味するTall Talesとかかっている）

アルトドルフ当局は〈グリフオンの尻尾〉紙——風刺的な反体制の新聞で、貴族による大衆への抑圧を終わらせようとしている集団、“人民の名誉革命”の機関紙だ——の在庫を取り扱う呼び売り商人たちを取り締まっている。これによってアルトドルフの街路には苦難の時代が訪れている。警備隊や領邦軍が、革命家とみなした者たちへガサ入れをしているからだ——だが、そのような小競り合いはチャンスを生んでもいる。皇帝のシリング銀貨を素早く受け取って革命家たちに追い討ちをかける者らがいれば、（かき集められるだけのお金でもって）自由の旗を支援する者たちもいる。けれども、ヴェレナ教団が“名誉革命”を密かに支援し、エンパイアの法務卿その人が〈尻尾〉を公然と財政的に支援していることに、新参者の集団が気付いてしまったら、そのような情報をもって何をなすべきだろうか？



裏社会に生きるロウヘヴン一家

ロウヘヴン一家は犯罪集団で、ライクランド中のパイ屋にどっぷり手をつけてしまっている。アウエルスヴァルトでは、ナルンの“黒色火薬週間”中に公のもとから逃亡した子どもよりかき集めた恐喝ネタの数々で、フェルディナント・フォン・ヴァレンシュタイン伯を震え上がらせた。彼らはまた、そうと望めば議員全員を火刑台に送り込むのに充分なだけの醜聞の証拠を握っているため、町議会は一家の思い通りに操られている。放置されているのは森の中に取り残されて無駄な抵抗を続けている老アデルベルト卿ただ1人だ。ゆえにこの老貴族が街道でよそ者の一行に出会った際、彼がアウエルスヴァルトの3人の主要なハーフリングたちの暗殺に金貨を払ったことが判明すれば、ロウヘヴン一家は度肝を抜かれることになるだろう：暗殺対象の3人とは、“肉屋”アロイシウス、“パン屋”ボルネリウム、そしてライクランドで最も恐ろしい燭台職人、“彫刻家”コッカーだ。

“珍奇”こそわがミドルネームなり

創造祭——ベーゲンハーフェンでの三日間続く春の祝祭——が間近に迫っている。“マルサシウス動物展”のマルサシウス博士はもっと多くのコレクションを必要としている。彼の近況はおぞましいものだ；ミュータントたちは共食いし、スクイッグは育ち過ぎて檻を破ってしまい、もっと悲惨なことは口にしたいくもない。彼は自分のショーで展示できるのなら、奇妙な生きものに大金を支払うだろう。このような珍奇な生物を送り届ける者たちは、活きのいい品物をちゃんと届ける必要がある。唯一の問題は、生きたミュータントや怪物、さらにおぞましいものを引き連れたまま逮捕されたなら、重い罰金を課せられるか、時には死刑にもなりうることだ。とはいえ、奇妙な生きものに出くわした際に、そいつらをただ皆殺しにするよりも、金に替えたほうがよいのは間違いないところである。

ちょっとした殺人

ディースドルフには犯罪一家たるハヴィルンド一家とフランクル一家の間で長きにわたる抗争と流血の歴史がある。刃傷沙汰、毒殺、銃撃戦、リンチ——およそ思いつくりの悪事を彼らは働いてきた。地元の人々は基本的にほとんど関心を向けず生活が続いていたが、ここ最近で復讐殺人がひどく多発し、それが通りすがりの魔狩人ロター・メツガーの目にとまった。彼によれば、これらの殺人が“血の神”に捧げられる儀式的殺人に酷似しているとのことだ。まさにその翌日、メツガーは血塗れの路地で滅多刺しになっている姿で発見された。自分たちの聖なる町が混沌の汚穢の影響を受けないようにすることに熱心な町長たちは、犯人を突き止めることができた者たちにはクラウン金貨5枚という破格の報酬を出すと発表した。どれだけ多くの町民が関わっているのか、シグマー教団がどのあたりまで全面的な調査に乗り出してくれるかは判らない……。

たわけ者ティロスの高塔建造、再来か

クリステン・マイセン夫人、モード・シェンケンフェルズ、“おばさま”ソルヴェーグ・ツヴァイシュタインが再び一堂に会する。この3人の裕福な未亡人たちは数十年の間お互いにいがみ合い、時節に応じて互いに駆け引きしたり、結託したり、金を出し合ってきたりしてきたのだ。彼女たちの現在の関心はダンケルベルクの丘陵でより高い場所にある土地を購入することだ。互いに競い合う未亡人たちは、各人が丘陵の同じ高さにある頂上の土地を所有しているが、誰一人満足していない。ゆえに、満足するためにさらに上を目指して、各自が自分の屋敷の上に高い塔を建築するよう依頼したのである。恐怖の中で見守っているダンケルベルクの人々は、その壊れそうな建物がまったく目障りで町の景観を損ねるばかりでなく、倒壊する可能性が高く、計

り知れない損害を及ぼすのではないかと恐れている。3人の商人たちがこの未亡人たちを阻止し、彼女たちの喧嘩を金輪際、終わらせるために傭兵を雇う資金を集めているのだ。

ワインと幽霊

ギュンター・オッペンハイムはライクランドでいちばん知恵の回る死霊術師というわけではないものの、進取の精神に満ちており、いささか変人だ。彼は、アイルハルト産の最高級ワインを飲んでいる時、ある着想が閃いた：年代物ワインの品質は、熟成期間ではなく、その経験に依存するのではないかと、と。どういうわけか、この考えから彼は最高のワインは殺人事件の犠牲者となった幽霊たちが世話した葡萄から生まれるのだと信じるようになった。問題は、彼の理屈がどうやら正しいことである！ 人里離れたオッペンハイム葡萄園がいまでは大変な成功を収めており、その葡萄の木は拘束された幽霊たちが世話しているのだ。オッペンハイムの成功に納得のいかないライバルたちは、厳重な鎖や、軋んだ音を立てる“立入禁止！”と書かれた看板の背後に横たわる秘密を探り出すために、金を払うだろう。

手抜き製造

こしばらく頻発している平底川舟の沈没は元をたどるとグリュンブルクの川舟造船所に繋がる。商人ギルドは川舟造船ギルドが舟を造るのに手抜きをしているものと信じ込んでいる。商人ギルドは自分たちが払戻金を確保できるよう、秘密裏に調査し証拠を集めるためのチームを編成している。しかし、裏を探ってみても、造船業者たちが何かしら粗悪品を製造しているようには見えない。だが、製造時の木屑を燃やしていたら、平底舟用の資材が使用する前に処理されていることに気づく者も出ていただろう。それで、削られた木材はいったい全体どこに消えたのであろうか？ おそらくその答えは“森人教団”の謎めいた帰還にあるのではなかろうか？

ワイン祭り

ワイン祭りはライクランドで産出される最高のワインを祝う、毎年恒例の招待制の祝祭である。このホルトフッセンの祝祭は多産と喜びの女神リアに捧げるものだ。毎年、ならず者やいかさま師、漂泊者たちは“黄金の大樽”——100年前のワイン祭りで貯蔵されたワインの樽——を試飲する機会にあずかるべく招待客たちから招待状を騙し取ろうとする。今年も違いはない。“漂泊者”のひとりがビーストマンのブレイ・シャーマンの変装した姿であるという事実を除けば、このビーストマンは1世紀前に“黄金の大樽”の中に移されたスラーネッシュのデーモンを喚び起こすためにやって来たのだ。ワインを味わうだけでなく、この祭りは参加者の誰もが決して忘れえないものに変ることだろう……。

余は皇帝なり

ケンペルバートはスティルヴォッヘ——ファッション週間——で、ライクランド中のありとあらゆる人々がやって来て、最新のファッションをひけらかす。皇帝カール＝フランツ一世でさえ群衆に紛れ込んでいるとの噂さえもが、囁かれている。騒ぎを起こしたりファッションショーの審査員ヨハン・ファン・ネスを動揺させたりしないように、お忍びでやって来ているようだ。参加者全員にとって不幸なことに、このニュースはティーンチの混沌教団、“銀の尖塔”を、この大盛り上がりイベントへ呼び寄せることになってしまった。魔狩人アルブレヒト・カッセルは教団員たちの到来を知っている。彼は密偵たちを雇ってこのイベントに潜り込ませ、皇帝の正体が露見する前に何か良からぬことが起きないか突き止めようとしている。密偵たちが“銀の尖塔”を発見したなら、カッセルはおおいに失望するだろう：彼は自分の教団員たちに慎重になるよう命じていたのだから……。

世界の目覚め

モールの終末カルト教団、“人々は限界なり”はシグマー教団に目を付けられている。シャーデルハイムを拠点とし、自らを“ネフェキエラの専門家”と称するタリマ・L・シューダー博士に率いられている。“人々は限界なり”は人類が全体として死の危機に瀕していると信じ込んでいる。この教団はまた、自分たちが人型種族全体の世話役であると信じており、メンバーの中には他の者以上の熱意を持ってこの職務に邁進する者もいる。もちろん、シグマー教団は宗教同士の争いになることを危惧しているので大っぴらに介入することはできないが、シューダー博士と“話し合う”べく雇われ者たちにお金を支払ってくれるであろう。

チキンのような味わい

イーピカリオンは——ボーダー・プリンスのミュルミデン出身の裕福な商人だ——オールド・ワールドのすべての動物を食すという探求の途上でシルデルハイムにやって来ている。現在、彼はこの地域の野鳥に目を付けている。シルデルハイムのレストラン経営者たちは喜んで親切にもてなしていたが、それも人々が姿を消し始めるまでのことだった。町の人々はイーピカリオンが食べているのが、単なる野鳥に留まらぬと確信している。怯え果て自暴自棄になった彼らは、通りすがりのあらゆる傭兵を雇ってこの外国の商人を始末してもらおうか、せめて町を去るよう彼に促すことになる。雇われた者たちがこのボーダー・プリンス人の部屋にやって来ると、彼らはイーピカリオンが死んでいるのを発見する。何かか内側から彼の臓物を食い破っていったのだ。その後、続々と死体が発見され、仕事を引き受けた傭兵たちが突如として第一容疑者となる；とどのつまりは、イーピカリオンを殺したのが彼らではないという確信が誰に抱けようか？ ということだ。

親指立てるほど大満足

“前掛け”プロセルピナ・アップルビーは約10年前にシュティムミーゲンの人々にネズミリング・シチュー——今では地元の名物だ——を提供し始めた。美食家たちはその豊かな味わいに感嘆し、医者たちはそのすばらしい滋養効果に驚嘆した！ だが旅の托鉢修道士がこれを食べ終わった後にネズミの鉤爪が付いた人間サイズの親指を見つけてしまうと、噂（および嘔吐）が燎原の火のごとくに広がったのだ……。彼女が調理しているネズミはいいたい、いかなるネズミなのか？ シュティムミーゲン文化財団は知りたがっている——ピニーは自分の下水道の秘密を誰かが突き止めるのを阻止するためなら、窮鼠猫を嘔む勢いで手段を選ばない。

漆黒の闇の中へ

先祖代々ネズミ捕りであるライネッケ・ラッテンファンガーによれば、ユーベルスライク地下にある下水道で、これまで見たこともないような何かを目撃したとのことだ。ビーズ状の小さな目がついているだけだが、粘着性の黒いベトベトした奇妙な斑点が左右の壁にへばりついているのが発見されたのである。中には、寸法や方位といった数字のような形をしているものもあり、大きな門型構造物のように見えると彼は断言する。さらに彼は、羊皮紙に羽ペンで書きつけるような奇妙な引っ掻き音が、彼の獲物が動き回ることによる通常音に加わっていたと断言する。ネズミが読み書きを学んだ、なんてことがあるだろうか？ いずれにせよラッテンファンガーは護衛を探している。護衛たちはユーベルスライクを案内してくれる博識な案内人を味方にする代わりに、散々な目に遭うかもしれない。結局のところ、下水道は町の至るところに繋がっているのだから……。

大空の目

ヴァイスブルックのグリュールベル家はこの町の大幅な拡大計画を立てている。彼らは建築のために木々を伐採している。グノルドク・マラカイソン——ドワーフのジャイロコプター操縦士——は最近、この新たな開発予定地の上を飛行した。しかし、彼は空中から地上を観察して、心底、衝撃を受けた。グノルドクは確か目撃したのだ：新たな町の建築計画の図式が秘密のドワーフの爆発のルーンと同じ形であり、しかも恐ろしいほど大規模であるということ。町の人々、特にグリュールベル家は彼の言うことを信じてくれない。だが2日前、彼が〈トランペット〉亭で呑んでいると、何者かが彼のジャイロコプターを爆発物で吹き飛ばした。空を飛べなくなったものの、彼は自分が気付いたことについて何かしらの行動をせねばという使命感に駆られている。彼のことを信じてくれる者が現ればの話ではあるが……。

モーニングコール

「今年の動かぬ太陽の日は一生に一度のお祝いにホイブルクへいらっしやい！ 食べ物や飲み物、キャセイの花火、その後はデトレフ・ジュールック作『カレダイアの炎』が上演されるよ！」そのとおり、ホイブルク芸術協会はこの時期に開催されるこのイベントを待っていた。というのも、町の周囲にはドラゴンを目覚めさせるのに充分なほどの花火が密かに配備されているからだ！ どうやら、ドラゴンを叩き起こすのが、彼らの計画のようである……もしもそうなら、事態の渦中にすっかり巻き込まれてしまった人々にはとても気の毒な惨状となるだろう——けれども、町の人々を救ったなら相当の報酬が得られることは間違いない。お金を払ってくれる生存者が残っていればの話だが……。

要塞と城砦

；THE BASTIONS AND FORTRESSES

エゴ対エゴ対エゴ

モントフォール公爵フォルカール、カラク＝ジフリン王ロロック・グラニットハンド、マーネゴルト・フォン・ゲートブルク辺境伯は全員で塔の中に足を踏み入れた。笑い話の枕に聞こえるかも知れないが、まさしく戦争が始まりかねない一触即発の状態だ。そして、アルラム・ハビッチ——“黒石の塔”の建築家であり、歪みの混沌神たるティーンチの帰依者——は自分の塔が引き起こしている事態に欣喜雀躍としている。ハビッチのあずかり知らぬところで、彼の弟子だった男が、かつての師匠が仕える真の主人が何であるのかを露呈させてしまったのだが、この元弟子にはどうしたらいいか判らない。ゆえに彼は〈二又の鬘〉亭の酒場で恐怖を紛わせつつ、自分を信じてくれる誰かが現れるのを——それが誰であっても——待っている。

ヘルムガルト隧道のクリーチャー

一地方の都市伝説に過ぎないが、飲んだくれの傭兵やニヤニヤ笑う商人たちがヘルムガルト隧道のクリーチャーのことを噂にしては、そこを通って旅しなければならぬプレトニアの同業者たちを心胆寒からしめている。口から出任せのはずが、最近になって商人たちから数え切れないほどの目撃証言が寄せられており、いまや、彼らはこの洞窟に入るのをきっぱりと拒絶している。動かぬ証拠のひとつとして、商人——ボンセット・ディスクレット——が恐怖に駆られて商品を置き去りにしたまま洞窟を逃げ出したというものがある。彼が商品を回収しに戻ると、どこにも残っていなかった。彼は現在では、これは一から十まで仕組まれたものだと確信しており、彼の商品を見つけ出したなら報酬を支払ってくれるだろう。



狩りの時間だ

スターリッヒ・フォン・ブルーナー伯はスターリッヒ荘園で開く集会のために護衛を雇っている。新規雇用者たちには特別な命令がひとつ与えられている：客を単独でうろつかせてはならないというものだ。不幸なことに、若き貴婦人、イオエラ・フォン・ヴァルフエンが姿をくらまし、彼女の行方を探さねばならなくなる。下階の部屋に入った者はたくさんの狩猟用具と狩猟戦利品展示室——その壁には人の頭の剥製が取り付けられている——を見つけてしまう。ここで見つかった者は伯の部下に拘束され、次の“スターリッヒの狩り”での獲物としてその晩に森の中へ解き放たれることになる。

未解決問題

キャセイ人のルー・バイ・グウォとクスレヴ人のセラフィン・マデイは助力を必要としている。ルーは超自然的なものへどっぷりと浸かっており、特にゴースト(幽霊)に心奪われている。セラフィンは合理主義者であり、霊的なものは何であろうと退け、神々の存在さえ否定するほどである。神々とは実在した人間の威光が顕現したものにすぎないと彼は信じているのだ！ この二人は幽霊を捕まえることでその証明または反証をなそうとしているわけだ！ 彼らは現段階で、いちばん有力な手がかりを見つけていた：“石”^{カーストーン}内で、衛兵どもに拷問を受けて死んだ収監者の幽霊が出るというのだ。けれども“石”は来訪者を受け入れておらず、そこで彼らは、いったん幽閉され、内部で身の安全を確保しながら、ふたたび外へ出るという計画への助力を必要としている。彼らの持つ外貨は他に負けず劣らず高品質なもので、この変わった仕事に対して充分なだけの報酬を払ってくれる。

村、集落、聖地

； THE THE VILLAGES, HAMLETS, AND HOLY PLACES

使命：無理難題

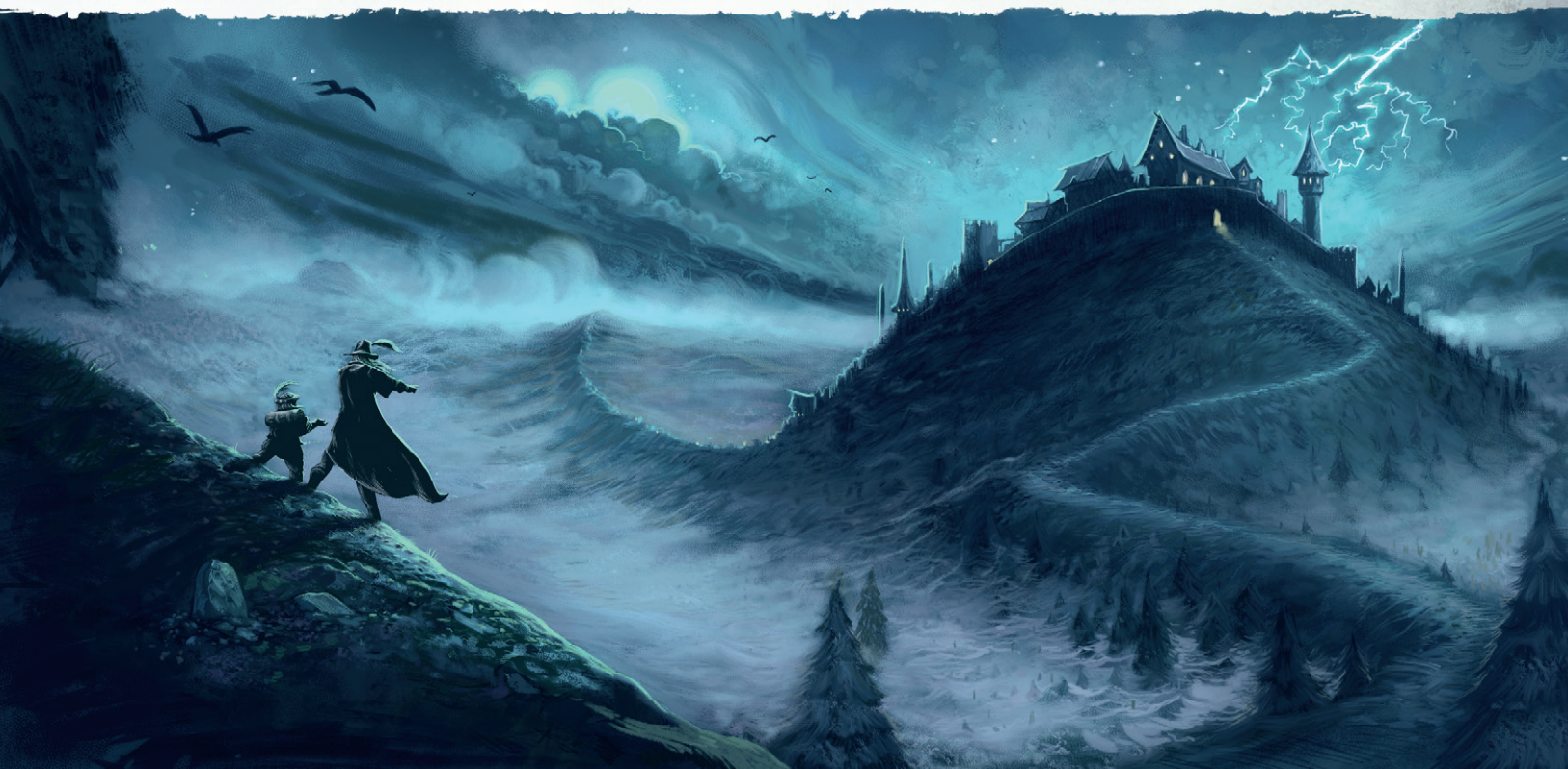
黒と緑色のローブを纏った謎の人物がキャラクターたちに接触してきて、浄化の炎修道会の聖画像と総大司教その人の印章指輪をちらつかせる。果たさねばならない仕事がある：拒否すれば死刑を宣告されるが、受諾すれば多少はマシになるようだ。シグマー教団は聖言修道院から『シグマーの誓約』を盗み出すための、鉄砲玉要員を必要としている。この仕事を完遂するための猶予は2週間しかない。

遺物、目醒めり

ホルスト・ハーネマン——ロットフルトの若き羊飼——は大変な事態に足を突っ込んでしまった。羊の群れを放牧していると、地面が崩れ、耳長の瘦せた狼と角のある甲虫の図像が一面に描かれた太古の墓にぶち当たってしまったのだ。高名な古物研究家ヨハンセン博士が調査のため村にやってきた。彼はホルストがネフェキエラの墓を発見したのだと確信した。それどころか、彼はそれがラーヘテブの伝説の墓だと信じているのだ！ これは本当のあのラーヘテブ——『シグマー・ヘルデンハンマーの生涯とその時代』のいくつかの挿話に登場する謎の人物その人なのだろうか？ 中に待ち受けるものと墓荒らしの双方からもたらされる潜在的な危険に気付いたヨハンセンは、探索を進めるために助っ人を雇おうと考えている。

ヴォーリンの魔術師

ヴォーリンおよびその周辺の町の人々は、静かで小さな村の郊外に住む魔術師のことをたいそう褒め称える。異様に背が高い、計り知れないほどに老いたその魔術師は、耳寄りの話を教えてあげたり、親切にしてあげたりすると、返礼としてお守りや呪文を提供してくれるのだ。その彼は何かを探し、焦りを募らせている；おそらく、何かしら手助けをすれば報酬を払ってくれるのでは？ 人々は彼が次のような押韻のある詩をぶつぶつと吟じているのをよく耳にするという：「川の側のゴルゴン、地にあいた大洞、そこでモードヘイムの年寄りがうろろう」



ウルリックの狼たち

見すばらしいウルリック教徒の一団が、**ツァーンシュタット**付近で最も険峻なる岩山の穴に“冬王”の寺院を建設している。この一団はこの村がウルリックにとっての聖地であると説く。というのも、ライクランドで冬にこれほど凍てつく地は皆無というのに、村の者たちは生き延びているからだ。ツァーンシュタットの人々は当初、この新参者を喜んで歓待していた。だが、彼らが寺院で狼の飼育を始め、吠え声が轟くようになると、村人たちはこのウルリック教徒どもに立ち去るように促してくれる者たちを必死に探し出す。粗暴な教団員たちがこの村の神秘に満ちた守護者の魔力に何らかの耐性があることが判明すると、この要求はとりわけ急務となる……。

古代の遺跡と恐るべき廃墟

THE ANCIENT SITES AND TERRIBLE RUINS

消えざるもの

火や剣、銃弾を用いて人々は何世代にもわたって“闇石の輪”をバラバラに破壊しようと躍起になってきた。ある時は、猛攻撃を仕掛けても跳ね返され、無傷だった；またある時は、破壊されても元通りとなるだけだった。“闇石の輪”は、次に混沌の月モールスリーブが昇った時に元通りとなる。かつて、高名な魔狩人であるオトフリート・カント隊長が、輪を破壊し、それが再生しないようその場で野営したことがあった……。1ヶ月後、彼は黒いオペリスクのうちの1つ貫かれた姿で発見された——それは彼を貫通する形で再生していたのだ。この禍根を未来永劫断ち切るための武器を探し出してくれたなら、金床修道会は黄金や恩義といった形で存分に報いてくれる。噂によると、必要とされるその武器は“闇石の輪”そのもの下に埋まっているらしいが……。

呪われし者に安らぎはなし

ドラッケンフェルズ城には、城内で死亡した不幸な者たちの霊が無数に存在するという。しかし、同じことは生者にとっても真実であるように思える。カスター・ドレックスパッツ——輝きの学府の魔術師——は、数十年前にドラッケンフェルズ城の略奪を試みた際に死よりも悲惨な運命に陥ることとなった。今日に至るまで、彼は目覚めることができないうまま、いまだにフレデルハイムの“大治療院”にて横たえられている。通常なら、そのような惨事を目の当たりにすると、無知

なる輩ならば彼を安楽死させてしまうことだろう；しかし、ドレックスパッツは厳重に保管しなければならない強力で不吉な魔導書の秘密を知っている。結界で守られた城のために、もうこれ以上は自分たちの同志を失いたくない輝きの学府は、城に囚われたドレックスパッツの魂を解き放ってくれる売剣たちを探している。

トリック・オア・トリート？

ヘルムガルトで10代の少年少女の不良集団が行方不明になっている。ほぼ1週間、捜索を続けても何ら成果は得られなかったが、彼らの家族は子供たちが、スリルを求めて馬鹿げた冒険をしに**ヘルスパイア**へ向かったと確信するに至った。地元の似非大魔術師はモールスリーブが三夜のうちに満月になると信じている。ゆえに、家族は必死だ：彼らは誰かがヘルスパイアに向かって子供たちを生きたまま連れ戻してくれるなら、どんな報酬だって支払うことだろう！ いざ発見しても、少年少女たちが帰りがらないのが唯一の問題だ。子どもらは“お姉さん”に会うためにここにやって来たのであり、“お姉さん”の方も彼らを帰そうとはしないだろう……。

親愛なる同族

豹のごとき優雅さと切り出されたサファイアのごとき目を持ち、忘れられないほど背が高いエルフが**シュティルガウ**の宿屋に泊まっている。彼は“三度嘲られし者”ラシエルと名乗り、この村ではこれまで見たこともないような形、品質、純度の貨幣が詰まった財布を差し出す。彼は自分を**ロウレイ岩礁**まで連れて行ってくれる舟を探している。しかし、その報酬にもかかわらず、彼は同行者を誰も見つけられずにいる。断られると“三度嘲られし者”ラシエルはただ微笑んでこう告げる。「私はもうずっとこの世界にいますし、あと数年、同族と再会できなくとも仕方ありません」と。キャラクターたちは彼をライク河へ連れて行くこととするだろうか？

サウンド・オブ・ミュージック

“歌う石群”のアーチの下で、ヒューヒュー唸る風が織りなす不協和音が頭に響いて離れないまま恐ろしい夜を過ごした後、パーティは文明地への帰路についた。次の夜、居心地のよい酒場の暖炉の周りにて、吟遊詩人がマンドリンを奏で始める。詩人の口から出る歌は“歌う石群”が織りなしていた哀哭と同じものだ——マンドリンから出るはずもない音である。酒場にいる他の者たちは誰も気付いていないようだ。その楽士が演奏を止めても、音楽は鳴り止まない。キャラクターたちは眠っても絶え間なく続く歌からは逃れられないことがわかる。生き残りたければ、その原因を見つけなければならない……。

